

事例
13

あの企業はこう使っている!

株式会社 中野屋高松

事例に学ぶIT・IoT導入



心に響く感動を提供するオンリーワン企業であり続けることを目指し、国内外からの旅行者をメインターゲットに讃岐うどん作り体験をはじめ、飲食業、土産販売業、製造業など多彩な事業を手掛けています。



〒761-8081 香川県高松市成合町8番地
TEL 087-885-3200
HP <http://www.udonschool.jp>

なんとなく「便利になりそう」とは思うものの「ウチの会社で、どう使ったらいいかイメージが湧かない...」。
そんな皆さま必見のコラムです。
高松のIT・IoT先進企業(リーディングカンパニー)が、IT・IoTをどう活用しているかを毎月連載で紹介いたします。
第13弾は、株式会社中野屋高松。代表取締役の羽藤寛幸さんにお話を伺いました。

ITツールを活用して従業員の経営意識を育てる

情報の見える化で、経営力を強化
紙台帳管理の限界
中野屋高松では7年前まで、予約から収入管理までの全てを紙の予約台帳で行なっていました。分厚い予約台帳をめくり、材料や道具の個数、体験教室参加者の要望を確認しながら、各従業員がそれぞれに行動。このような属人的な運営に加え、複数ある部門で何がいつ売れたのかなど日々の詳細を把握できておらず、どんぶり勘定になっている状況でした。また、お客様の予約方法も多様化し、このままアナログ経営を行っていくことに限界を感じるようになってきました。

コロナ禍で業況悪化 & 人材不足
生活の変化や不安から観光需要は蒸発し、業況は大きく落ち込みました。また、従業員の離職も発生。

導入ツール
予約システム (salesforce)
販売時点情報管理 (レジ)

導入ツール
会計システム (freee)

何がいつ売れやすいのか、どの在庫を多く用意した方がいいのかが視覚的に分かるようになり経営分析ができるようになりました。

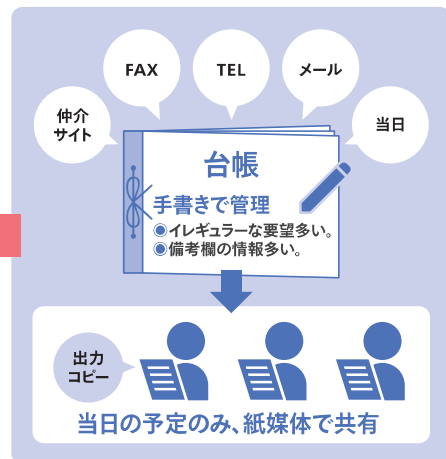
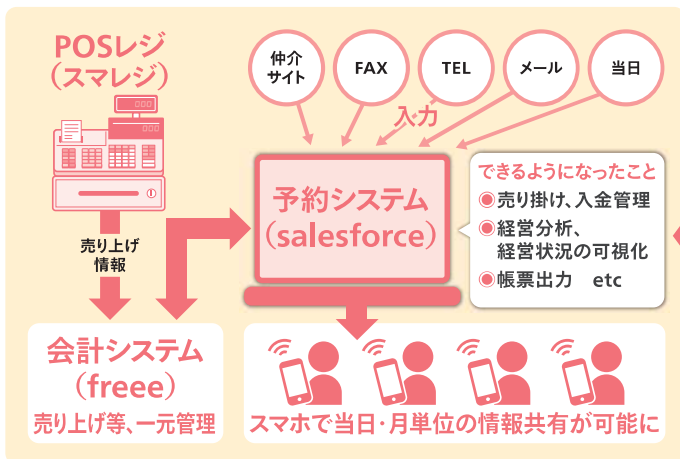
2つのITツール導入により、会社の状況が見える化したことで経営陣は全体売り上げ、社員も会社運営を個人レベルで意識できるように。会社が一体となって経営していくことが可能になりました。

羽藤さんに聞く
今後のビジョン

ITツールの導入は、業務の効率化につながります。効率化によって空いた時間を利用して、当社ではお客さまの接客に力を入れたり新商品の開発を行うています。接客や開発のように、人間にしかできないクリエイティブな仕事は人間が、機械で自動でできる仕事は機械に任せるといったように上手く役割分担を考えることで企業価値を高め続けられるのではないかと考えています。今後もITツールを活用し、DX化を進めていきたいですね。

事例

業務効率UP & 意識向上
ツールを活用しアナログ経営から脱却



- 効果
- 予約情報を一度システムに入力すると、領収証や請求書発行がボタン一つで可能に。
 - 担当者が売り上げ等を把握でき、チームで目標を持って仕事に取り組み、従業員の意識が変化。
 - 手間を省いて、作業時間を短縮したことで、業務効率UP。その分、お客さま対応に力を入れることができています。

- 課題
- 予約情報を全て紙で手書きで管理
 - 領収証や請求書は台帳を確認しながら手書きで発行。二度手間、三度手間。
 - チームで目標を持って仕事に取り組んで欲しいが、売り上げなどを担当者が把握できていない。